
封印聖女 ウマシカ劇場・・・？

檜高 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印聖女 ウマシカ劇場・・・？

【Nコード】

N9422Z

【作者名】

檜高 黎

【あらすじ】

作中のシーンを笑いに代えてお送りするつもりです。

笑うかどうかは、自己判断でお願いします。

笑いと言う要素が、本編の物語には、ほぼないので作ってみようかと思いました。

ただの自己満足ですが、笑って頂けたなら幸いです。

余りのくだらなさに、寒気をはしると書いてる本人は考えてますが、年明けそうそう風邪を引かないように気をつけて見て下さい。

風邪を引いたと言われても、当方は責任を負う事はないのであし
からず……

それでは、ハジマリ、ハジマリ〜!?

勢いに乗ってしまうと別物になるかもしれません……

まあこんなモノです・・・（前書き）

作中のシーンを笑いに代えてお送りするつもりです。

笑うかどうかは、自己判断でお願いします。

笑いと言う要素が、本編の物語には、ほぼないので作ってみようかと思いました。

ただの自己満足ですが、笑って頂けたなら幸いです。

余りのくだらなさに、寒気をはしると書いてる本人は考えてますが、年明けそうそう風邪を引かないように気をつけて見て下さい。

風邪を引いたと言われても、当方は責任を負う事はないのであしからず・・・

それでは、ハジマリ、ハジマリ〜!?

まあこんなモノです・・・

誰かを待っていた様に・・・雷鳴は咆哮をあげた。

暗雲を切り裂き、閃光が槍のようにビルと言う大木を避け、狙いを定めると迷う事なく獲物を捕らえる。

空から落ちた蒼き落雷は、彼の姿を閃光の彼方に一瞬にして覆い隠した。

眩い程の閃光に人々は一瞬にして、視界を奪われた。

人々が視界を取り戻す頃、雨は止んでいた。

周囲は騒然とし、混乱していた。

丁度真向かいの店の軒下から見ていた、中年のサラリーマンが声を荒げた。

「おい！ 人が落雷に撃たれたぞ！ 俺は救護に行くから誰か救急車と警察を呼んどいてくれ！」

男性が、急いで店を出ると落雷が落ちた場所駆け寄る、アスファルトが焼け焦げる匂いと煙で辺りはよく見えなかった。

急ぎスーツのポケットからハンカチを取り出すと口の周り覆う。

男性は、どうにか落雷の落下した場所へとたどり着いた。

周辺はアスファルトは熱を帯び、靴を履いている状態でも熱を感じる事ができた。

落雷の落ちた現場は、半径メートル程の穴が顔を覗かせた、穴を縁どるように煙が立ち昇っていた。

現場を目にした男性は驚き、その場に呆然と立ち尽くし呆れた。

「君……なにしてんの？ 当たり前じゃないか……こんな日に鉄製の刀なんか持つてるからだよ？」

青年は、右手に刀を持って仰向けに倒れて、ピクピクしていた。

顔だけ振り返って、

「いや、普通こういうことないでしょ……」

と、呟きガクツと果てた。

お互い結構イロモノ？（前書き）

一部ネタばれがあります。

本編には支障がないので言いのですが。

お互い結構イロモノ？

兜を脱いだランスロットは、黒く長い髪、碧い瞳に端整な顔立ちをしていた。

彼は一瞬心を奪われた、だがその姿に違和感を感じた。
口から思わず言葉が漏れる。

「綺麗だ・・・」

ランスロットは笑った。

「貴殿は、男が好きなのか？ 生憎、私は男がダイスキだ！」

その言葉に、彼は服を脱ぎ答える。

「実は、俺もナンダ！ 運命の人をやっと見つけた！」

互いに意思を確認しあい、ランスロットは馬にまたがると、彼の
手を取り馬で走り出そうとする。

そこへもう一人、新たなライバルが現われた！

「まてい！ このパーシヴァルも実は・・・男がダイスキダー！
！」

そして三人は馬にまたがると、去っていった。

残された兵士は、三バカだと、吐き捨てて城に戻っていった。

ガウエイン貴方もですか・・・（前書き）

作中のシーンを笑いに代えてお送りするつもりです。

笑うかどうかは、自己判断でお願いします。

笑いと言う要素が、本編の物語には、ほぼないので作ってみようかと思いました。

ただの自己満足ですが、笑って頂けたなら幸いです。

余りのくだらなさに、寒気をはしると書いてる本人は考えてますが、年明けそうそう風邪を引かないように気をつけて見て下さい。

風邪を引いたと言われても、当方は責任を負う事はないのであしからず・・・

それでは、ハジマリ、ハジマリ〜!?

ガウエイン貴方もですか・・・

ガウエインはクロウに向かい走り出す、そして真上からクロウ目掛けてガラティーンを振り下ろす。

瞬間クロウは鞘から刀を引き抜き、両手を使い刀身で受け止める。甲高い金属音がこだまする。

「くっ！」

余りの重い剣戟にクロウは、歯を食いしばる。

ガウエインの剣に一層力が増す、このまま押し切るつもりの様だ。クロウは焦った、このままでは刀が折れてしまう危険性があったから。

「どうした？ 漆黒の者？ その程度か？」

クロウは焦る！ どうしたらこの局面を・・・切り抜けられる！

クロウの顔ギリギリに、ガウエインの顔が迫ってくる！

ガウエインは、鼻の下が伸びていて口をタコのようにクロウに近づけた。

クロウの口に、ガウエインのタコのような口がやわらかい音を立てて密着した。

「フハハハハ！ 実にやわらかい！ このような唇の感触は経験したことが無い！」

クロウは、その瞬間、動かなくなった。

何度も繰り返される接吻に、ただ。ビクツと体を震わせるだけだった。

刀が折れる前に、クロウは心が折れてしまった・・・

そこに現われた、二人の騎士はガウエインに言う。

「まてい！ ワレラも仲間に入れてくれ！」

二人の騎士は全裸だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9422z/>

封印聖女 ウマシカ劇場・・・？

2011年12月29日15時48分発行